

学科 こどもの生活学科	所感 本学での2年間の教育経験により、本学学生に適した授業内容・方法の基盤が整ってきたが、整備が十分でない科目も残っている。引き続き真摯に授業改善に取り組んでいく。
氏名 松橋 俊輔	

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。

1 教育の責任

<p>私は家政学部子どもの生活学科の教員として2023年4月から授業を受け持っている。2024年度には、オムニバス科目を含めて9科目を受け持った。うち1科目は今年度新たに担当し、アウトリーチ活動では団体リーダーを務めた。</p> <p>右の一覧表のうち、教職必修科目は、幼稚園教諭・小学校教諭・中学校教諭(家庭科)・高等学校教諭(家庭科)・栄養教諭を目指す学生が教職教養を身につける授業である(添付資料1)。また、保育士資格の必修となっている科目もあり、専門家の養成に責任を負っている。</p> <p>総じて基礎的な段階に位置づけられた科目が多い。また、教育原理や教育課程論は理論的・体系的な性格が強い。これらの科目の内容を十分に修得させることで、これ以降の学びの強固な基礎を作り上げることに責任があると言える。</p> <p>その他)リメディアル教育、就職指導、学生相談、オープンキャンパス模擬授業等</p>	科目名	学科	開講期	受講者数	備考
	基礎演習A	こどもの生活	1年前期(2024)	35	オムニバス 初年次教育
	基礎演習B	こどもの生活	1年後期(2024)	35	オムニバス 初年次教育
	教職入門	こどもの生活 ライフ・管栄	1年前期(2024)	35、13・7	教職必修科目 保育必修科目
	教育原理	こどもの生活	1年後期(2024)	35	教職必修科目 保育必修科目
	教育課程総論	こどもの生活	2年後期(2024)	44	教職必修科目
	教育課程論	ライフ・管栄	3年前期(2024)	13・11	教職必修科目
	生涯学習概論	ライフスタイル	4年後期(2024)	22	
他2科目					

2 教育の理念と目的

上記のように、私は教育・保育に関わる専門家の養成に責任を負っている。この責任を果たすにあたって、教育の理念や目的に関して留意していることは、次の二点である。

第一に、教育実践をデザインする上で、目の前の現実の学生と、彼ら／彼女らが専門家・市民・個人として生きていくべき世界とを両極として捉え、そのどちらも見失わないことである。

一方では、教育において問題なのは、究極的には学生一人一人がどう変容したかであり、何を教えたかではない。そして学生の学びは、学生の関心や既存知識と関わりながら、学生自身の活動によってしかなされえない。他方で教育は、世界の存続と改善に責任を負ってもおり、学生を導きいれるべき世界について、あるいはその世界に蓄積された知について、学生に知らせることで世代を超えて文化を継承していくことが必要である。単純化すれば、前者は教育における方法の側面に、後者は内容の側面に関わっており、この間に、個々の授業の目標から教育という営み一般の理念にまで連なる手段と目的の連鎖が構成されるものと考えている。

以上を踏まえると、一方で、学生に対する理解を深め、現実に学びを駆動させるような授業をデザインする必要がある。他方で、現代社会および専門職実践についての理解を絶えず更新しつつ、人間の学的知と文化の蓄積に対

する理解を深め続けることを通して、伝承すべき内容を問いつづける必要がある。こうした枠組みの中で、個々の教育活動の限界を見据えながら、適切に目標・内容・方法を吟味していきたい。

第二に、学生に人間としての主体性をいかにして養うかということである。ここで主体性とは、所与の理念・目的に対する手段となる活動に対して無批判に取り組むことでもなければ、自分の感情・感覚・経験のみに基づいて無反省に表現・行動することでもない。社会的現実や学問的知識に対して謙虚であり続けることと、自分自身の感性に基づく思考と行動に責任を持つことが、ともに必要である。そうした意味での主体性を養ううえでは、学習のプロセスを、教育者によって恣意的にデザインしうるものとしてではなく、自由な行為の可能性をもった諸個人間の複雑な相互作用のプロセスとして捉える必要があると考える。これを踏まえ、学習者に世界・他者との出会いをもたらすとともに、人格的な関係性を支えとして、学習者自身が自己や他者に対して現に負っている責任の自覚を促し、その引き受けを手助けしていくことを目指す。

3 教育方法

教職課程の中で基礎的・理論的な科目を担当していることから、教職課程コア・カリキュラムに規定された事項を広く身につけさせるため、講義形式による知識の提示が一定程度必要である。ただし、一方向的な情報伝達では効果が薄いため、学生自身に情報を読み取らせ、解釈させて、説明させたりまとめさせたりする能動的な活動や、関連する問いを投げかけてグループや授業全体で意見交換やディスカッションをさせる時間を挟み込んでいる（添付資料2）。

また、学生の主体的・自律的な取り組みを引き出すため、そうした能動的活動の内容や題材については、学生自身が重要性を実感できるものや、知的好奇心をくすぐられるものにするよう工夫している。加えて、歴史に関する内容など、学生にとって実感がわきにくい授業においては、映像資料を積極的に活用している。

評価方法は、学生の学力を多面的に評価するために、複数の評価方法を組み合わせるように努めている。知識事項のウェイトが大きい科目では、筆記試験を用いるとともに、知識を自らのものとして有機的に体得してもらうためにレポートも課している。小テストは採点をして返却し、レポートにはコメントをフィードバックしている。

4 授業改善の活動

各授業終了時に学生に学びや考えについてのリフレクションを記入・提出させているが、その際に、授業に対する感想・要望・疑問等を書くように求めている。その記述を踏まえて、その都度授業改善を行っている。

また、学期末にはアンケート調査を実施しているため、その結果を踏まえて授業改善を行う。昨年度のアンケート結果を踏まえ、今年度の授業では特に学生による知識構成的な活動や対話的な活動を増やした（添付資料3）。

また、大学として実施した公開授業においては、自らの「教育原理」の授業を公開するとともに、他の教員の授業を見学した（添付資料4）。

5 学生の授業評価

2024年度の評価は添付資料のとおりである（添付資料5）。総じて平均点を上回っているが、平均より低い評価となった科目も一部ある。評価の低かった科目は、授業の方法というよりも、扱う内容と学生のニーズとのミスマッチが原因となっていると判断している。これをふまえて、受講生の特性やニーズを見極めて、目標・内容の再構成を進めているところである。特に近年は学校教育や子育て環境をめぐる変化が目まぐるしく、その状況を的確に反映しなければ学生が本当に知りたい内容の授業をすることが難しくなっているように思われる。むろん、時代を経ても変わらない知や、科学的な知見を基盤としながらも、その切り取り方や論じ方について工夫を重ねている。

6 学生の学修成果

上記の授業方法と改善により、理論的な内容の科目でも、多くの学生に学びの意義を感じさせるような授業とすることができ、授業での学習が進むにつれて、自律的に学び出す学生が出てきている。具体的な反応としては、「これまで歴史や哲学は苦手だったが、この授業ではじめて面白いと思った」（教育原理）というものや、「はじめは関心の持ち方が難しかったが、色々調べたりながら懸命に聴いているうちに少しずつ分かってきた。教育について考えるときの視座がぐんと上がった」（「教育課程論」）というものがあつた。

7 授業科目に関連した教材開発

予習・復習はPCRシートを配布して取りまさせている（添付資料6）。特に復習に関しては、多くの授業でこまめに小テストを実施することで、着実な取り組みを促している（添付資料7）。授業においては、多くの場合PowerPoint資料を作成し、印刷して配布している。また、学生による知識構成活動による学習においては、複数テキストを取り合わせて作った独自のプリントを配布して作業させている。

8 指導力向上のための取り組み

学内GPでは業務におけるAI活用の方法の模索に取り組み、本学FD研修会では授業におけるAI活用について事例報告を行うなど、ICTツールの利活用について模索を進めている(添付資料8)。教育実践研究については、学術的成果として発表するほどの学問的専門性を備えていないため、発表はしていない。しかし、日々の授業内容自体がそもそも指導力や教育のあり方を追い求めるものであるからして、授業内容の構成自体がつねに自分自身の教育のあり方への問い返しとなり続けている。

9 今後の目標

短期的な目標としては、本学の学生の特性に合わせた目標・内容・方法設定による授業をすべての科目で組み立てることである。同じ内容を扱うにしても、できるだけ学生自身に主体的・協同的に学び取らせるような形式を進めていく。

長期的な目標は、次の二点である。第一に、限られた時間での学習で、学生達にどのような知識・教養を身につけさせるべきかを、学生の様子や時代の変化などを踏まえて精査していくことである。第二に、教育と学習のプロセスを通じて、「理念」として示したような論理的思考力・読解力・実践的想像力を身につけさせられるよう、方法を工夫していくことである。

10 添付資料

添付資料1 シラバス、添付資料2 授業プリント①、添付資料3 授業プリント②、添付資料4 公開授業結果、添付資料5 アンケート結果、添付資料6 授業プリント③、添付資料7 小テスト、添付資料8 FD研修会発表資料